

第2回次世代協議会第三部会（地域・環境）概要

平成18年12月21日（木）午後3時から
区役所本庁舎6階 第三委員会室

出席者 福富護、鈴鹿美佐子、玉盛正陽、秋山英淳、渡辺芳子、田谷節子、
新倉康夫、吉田哲也、青木俊明、塚本里子、
四谷警察署 代理 課長代理 堀田一二
新宿消防署 代理 警防課長 原修

1 開 会 福祉部子ども家庭課長

2 資料の確認

3 議 題

(1) 親への働きかけについて 方策案に基づき協議

ア 委員からの報告

イ 課題解決にむけて

ウ まとめ

(2) その他

4 議 事

部会長

前回、とても活発に議論が盛り上がった。時間がないという状況すら感じたぐらいだったが、なかなかその整理が難しい。焦点は、親への働きかけをどのようにしていけるのだろうかということ、ある程度皆さんの方から明らかにされてきたことだろうと思う。声かけ運動などの話もかなり具体的になってきたが、できるだけ具体的な提案にして、1つでも2つでも、発信ができれば、この会はひとつ役割を果たせたんではなかろうかというふうに考えている。その意味で活発なご議論をお願いしたい。

早速、委員の皆様から、その具体的な親に対する働きかけということに関してご提言をいただいている。そこをまずきっかけにして議論を進めてみたらというふうに思う。

委員

中学生、小学生、高校生の子どもがいる。大きくなるに従って、子どもと親の関わり、地域が関わっていく部分が少なくなってくる。子どもがまだまだ小さく赤ちゃんのときに地域に入っていけるような、自然な形で地域や区の方が受け入れてくれるような何かがあればよかったのではないかなと思う。

例えば育児サークルの中からの仲間意識を育て、通学路での旗振りや見守りを行い、子どもが大きくなれば、自分の子育てを離れて、地域の見守りパトロール隊に参加するというように、順次移行していくような、何かルールが引かれたらいいなと思う。

部会長

小さいうちから延長上に中学生、高校生がある、子どもが小さいうちから関わるということの意義というものを見直してというように受けとめた。

委員

今は大学生になった子どもが小学校に入ったころPTAの役員をやった、その頃は時間に余裕がある人や積極的な方が立候補してやってきた。

小学校を卒業するころになって、時間のない人でも、例えば日曜日の校庭開放のお手伝いができる方とか、「お手伝い制度」という公平なシステムができてきた。

地域の例会とか町会でも、誰でもちょっとでも関われるシステムを取り入れ、子どもと接することによって楽しい時間を感じてもらい、地域に協力的になる可能性が高くなっていくのではないかと感じた。

部会長

まずは、経験させるという、その経験のシステムを、どうシステムづくりをつくっていけるかというように受けとめた。

委員

子どもに対して関心を持ってほしい親、あるいは親が働いていて、なかなか接触できない子どもたち、サークルとか地域の活動に参加してない子どもたち、この辺に問題があるかなということで、やっぱり親の理解を得たいということで話をしてきた。

親がいろんなものに参加したり子どもが参加したりしなければ、逆に、こっちから何か提供していったらどうだろうか。

例えば、実際にあった話を、子どもがどう思っているのか、あるいはどういうことがあったのか、犯罪を犯す人たちとはどういうことを考えているのかというように幾つかのチャンネルから見たものを、物語風のストーリーを作り、皆さんに読んで貰ったらどうだろうか。週1回ずつ配れば、年間で52回、52話の話ができる。

また、「声かけワッペン」とか「声かけステッカー」とかを胸につけて、この人は安全な人だということをやってみたらどうだろうか、一応こんなことを考えてみた。

部会長

具体的に何か物語、読み物、読んでもらえるような、そういうものを少し送るといって、具体的な提案と受けとめた。

委員

育成会として、地域との関わりを持っている。

子どもたちを守るに当たっても、私たちと子どもたちの世界だけではなくて、やはり大人の繋がりがないとまずいのではないかな。地域センターを有効活用して地域センターに遊びに来ている子どもたちを大人の中に入れ、企画や、行事の呼びかけ、こんなことをしてみたいというような意見をその子どもたちから吸い上げることができるかなと思う。

「区のできる事」というのは、育成会の認知度を高めるなど地域団体全般の広報活動、それに伴う予算の計上ということで書かせていただいた。

また、これから「居場所3事業」みたいなものが始まり、「モデル校」による実施が来年度から始まるというふうに聞いている。「放課後の学校の開放」も始まってくようだが、子どもが少なくなっていく中、子どもの取り合いをしたのでは何のメリットもない、年度が始まる前に子どもに関わる方たちが話し合っ、各団体の年度が始まっていけば、非常にスムーズに、行事だけでなく地域の中で大人と子どもの関わりも自然にできてくるのではないかなと考えた。

部会長

いずれにしても、認知度を高めるということの大切さをお話しされた。具体的に、子

どもたちとどう関わっていけるのかということも課題に。

委員

「食育」ということに今興味をもっている、保護司もしているが、非行に走る子どもの半数以上が、親が子どもに向かって話をしない、じっくり話を聞いてくれないことを伺った。一日一回でも、親子で食卓を囲んで、その日の出来事を話すという習慣をつくるのが、まず家庭においては大事なのではないか。

「地域でできること」として、「育成会の地域レクリエーション」、地域センターでの「みんなの料理教室」、「映画会」をやっている。

地域の核になるのは地域センターではないか、そこは育成会や、認知されている団体は無料で借りることができ、子どもたちも来やすい、いつでも入ることができる。地域センターを、もっと活用したらよいのでは。

「区でできること」として、四谷中学校がモデルケースとして家庭科の授業中に、年間10時間を食育の授業に充てている。子どもたちに作らせ、子どもは興味を持って、家へ帰って作る。お母さんに食べてもらう。お母さんも関心が出る。嫌いなものもなくなる。大変いいお話を伺った。全部の中学校に広めていただきたい。

四谷中学校の栄養士さんは大変熱心で、野菜も無農薬とかを買って、どこでとれたのかなど子どもたちも興味を持ってくれると話していた。ぜひその辺も広めていただきたい。

委員

これから始まる「火の用心の見回り」を子どもだけではなくて、親への働きかけ、初めて声をかけてみようとしている。子どもがまず入ることによって、大人が入り込める余地というものをつくっていくということが必要なのかなと感じている。

お祭りのときも地域に少しでも足を踏み入れていただけるような場を設けていこうと、2年ほど前から必ず十二、三人のお母さん方、お父さん方に呼びかけ、袴てんを着て、保護者も地域の人なんだよということをうたい文句にお誘いしている。

自分の子どもが山車に参加するとかお御輿を担ぐということが具体的に見えてくるものに関しては、本当に積極的に入っている、その都度、町会長さんとか青年部長さんの地域の方をご紹介しながら、顔見知りになれるチャンスというのを少しずつ増やしている。今年は夜間警備ということで、プラスしていければいいかなと思っている。

また「四谷冒険あそびの会」、「プレーパーク」など幅広く活動を始めている。近隣の老人会の方が、今3名ほど、参加してくださっている。最初は、高齢者の方も「昔あそび」というテーマで入っていただいたが、次のときは何かできることがあるのではないかとということで、逆に声がけしなくても入ってきてくれる。

木工についても、竹トンボをつくったり昔あそびを自分の方から提案してくれたり、自然にスタッフとしての関わりが変わっていった。本当に素晴らしいなと思っている。

育成会でも、ほかの事業でも、ほかの団体と競合しちゃうという考え方ではなくて、逆に、PTAのそれぞれのやっている活動にこちらの方から出向いていくというような、部分があるとうまくいくのかなと。今度、うちにはこういうことがあるから来てねというような、ギブ・アンド・テイクみたいなものが成り立つのではないかと。

区は、そういう「お助けマン募集」的な部分で、地域で行っていることを、知らせてくれるといい。四谷地区協議会の中では、今「コミュニティ」という分科会があって、その中でいろいろ3カ月情報ということで、地域で行われていることを集約し掲示板に張るという作業が始まっている。

「あいさつ運動」の方では、前回の話をもとに、育成会で話し合いをした結果、来年度は、四谷地区協議会とも協賛し、四谷地区協議会の役員会でも承認を受け、ネットワークを結んで、全体的に一斉活動に入ろうということになった。イベントをして、ホールで標語を募集、ポスター募集、イメージキャラクター募集、子どもたちに缶バッジ、大人には有志で腕章か缶バッジで、同じものをつけて、同じマークを採用することによって、知っている人を地域にふやそうというような形で取り組みをしていきたいと思っている。

四谷地区協議会の「子育て、高齢者の分科会」と「コミュニティの分科会」、「防災・防犯」ということで、現在マップづくりの更新の作業をしている。そちらの方とも協賛しながら、地域見守りとあいさつ運動の連携を図って、地域全体に展開できるということを目指して話し合いを始めている。

部会長

「コミュニティスクール」という動きと無縁ではなさそう、簡単にご紹介したい。

委員

今日、初めて育成会の方で「コミュニティスクールの概要」について聞き勉強を始めた。その中に「あいさつ運動」とかいうのが入っていた、今、ちょうどいいタイミングにコミュニティスクールの取り組みとあいさつ運動が合致したというところで、いろいろな話があった。

部会長

学校というのは、地域の中にあるにもかかわらず、学校という一つの中でという意識がとても強いところだが、コミュニティにどんどん出ていくということは、従来型とは違った流れが、今あるようにも思う。これなどはちょっと見守っていく必要があるのかなと思う。

委員

校長先生が変わると、学校のシステムが一気に変わってしまうというところがあるので、地域の方で見守り、そういう運営協議会ができれば、学校の校長先生が変わっても、地域のやり方という部分でやれるという話もあった。

部会長

少し議論を深めれば具体案が何か見えてくると期待できるお話をいただいた。

事務局

「放課後子どもひろばの実施について」

今既にある、「放課後の校庭開放」と「スポーツ交流会」と、「子どもの居場所づくり」という、教育委員会の方でやっている学校を中心とした活動で3つに分かれているものを、予算を統合して使いやすくしていこうというものだ。地域の方の力を借りて行っているものだが、それとは別に、日常的に学校の施設を地域の小学生の遊び場として、居場所として活用していこうというものだ。

もともと学校というのは、放課後は地域の皆さんや子どもたちの居場所であったわけで、それが今の社会状況の中で、なかなか自由に使う形にはできてない。そこを、システムとしてつくっていこうと、新宿区が考えたものだ。

来年度は6カ所で考えている、区の方で「遊びの支援者」と、「学習の支援者」を配置し、平日の小学校を子どもの居場所として活用していこうというもの。そこに、これまでの居場所事業とか、区民の皆さんで活動していただいていたイベントなどを組み合わせせていくということで、いろいろな形で地域の皆様の力も発揮していただこうと考えて

いる。

放課後の居場所ということで、子どもたちは一回学校に帰らなくても、登録すれば、そこで遊べるような形で、今のところ考えている、「遊びの支援者」と「学習支援者」、それに「管理責任者」も置いていく考えだ。

6校でモデル的に実施し、課題や今後広げていくに当たって、地域の皆様と協議をして広めていきたい。

場所は、新宿区の小学校で余裕教室、すべてあるわけではないが、校庭、体育館、それから幾つかの部屋を学習活動とシェアしながら活用していく、19年度の予算で審議いただき、6月からやっていくため準備を進めている。

部会長

「心の東京革命推進モデル」で、戸塚地区がモデルとして紹介されている、簡単にご紹介したい。

委員

あいさつ運動というのが、東京都の今年を中心になってきた。私どもは10年来、あいさつ運動を兼ねた運動をこつこつやってきている。

マップ作りもPTAのお母さん方が歩いて、時間をかけて地域社会とのあいさつを基本に行ってきた。

地域安全連絡協議会というものを、育成会を中心としてつくったが、警察の講堂を貸すから、そこでやったらどうだろうかという話があり、学校の校長先生、校内の担当者も出席していただき、町会長も全員出席、町会の防犯の方々も出席するという形になった。

会議の前には、必ず戸塚地域全般にアンケートを出しそれで問題点を拾い出して、そのポイントを警察などから直にその協議会の場で返事をもらう。

交通解決でも、信号の問題とか、すぐ解決できないものは保留してもらい検討してもらう。危険率の高いような場所に対しては、土木課などとも相談しながら、解決していく。問題点がすぐ解決できるというところが一番すばらしい。

なぜこういうことができるかというと、PTAのお母さん方、育成会に参加しているお母さん方が、マップづくりも兼ねて、地域の人たちとの縁を深めたということが非常にプラスになっている。また警察署の講堂の中でやるということは、地域の諸団体のそれなりの責任者の人は必ず来る。今学校ではどういうことが問題になっているだろうか、あるいは地域社会ではどういうことが大変なのかが、すぐその場でわかる。継続してやっていったのが非常にプラスになった。

委員

大変すばらしい話で、ちょっと目からうろこという感じだ。このマップをつくるきっかけで、いろんな団体の方とコミュニケーションがとれたと……。

委員

中心はPTA。PTAのお母さん方……。

今、早稲田大学も今それと並行して、今すばらしいマップをつくっている。

事務局

マップは各特別出張所ごとに作成している。最後に見ていただきたい。

部会長 今の話は、ある示唆があったのではなかろうか。戸塚のモデル地区では、地域

安全連絡協議会を発足させた。そこが従来の、ネットワークの問題、ネットワークをただつくるのではなくて、そこに非常に具体的問題意識が加わったと。その背景には子どもの安全、そして学校の安全、地域の安全、ひいてはこれは町会の安全、区民の安全というような大きな目的がそこに潜んでいた。それが非常にうまく合体化して、機能がなされたということで、ある意味では今までの皆さん、委員の方からの話と非常に連動するのではないのかなと思う。

もう一つは、新宿には大学がいくつもある。そのあたりにも少し連携、発信をしていくということも、積極的に考えてもいいだろうと思う。大学も今、コミュニティ化、地域に開くということが高く評価される。

それから、居場所づくりとしての学校開放、地域センターにかわるもの、あるいはそれと並行してこれも積極的に活用してもいいのかなと考える。

そこでどう人々が実際に活動できるか、ボランティア的な体制をどう組織していくのかなということの問題がある。イベントで何かやっていくというのも一つのアイデアかなと、そんなことを感じた。

委員 大切なことは、問題点が起きた後、即解決できるような返事があるかないかということ。それには、事前にアンケートを取って、何の原因でその問題が起きているかということをとらえ、きちっとした回答がされるかどうか、これが人が集まる原因だろうということだ。地域社会の中でやっていく以上は、やはり根気よくやるしかない。

警察

いわゆる体感治安、社会不安の除去の中で大きなウエイトを占めるのは、やはり子どもの安全の確保ということだ。

逆に言えば、子どもの事件が起きたときの社会不安というのははかり知れない。警察は地域任せにするのではなく、旗を振ってやらなければいけないということだ。

来年度の生活安全部の中でも、子どもに対する被害というのが「重点犯罪の6大種」として加わっている。

そうしたことで、学校のセーフティ教室とか、いろんな行事に参加したり、通学路の警戒などを、まず警察の旗振りで全部行っている。

警察OBの「スクールサポーター」も、毎日各学校に顔を出しいろんな情報を聞いている。

先ほど話があったが、行政と、町の方たちの声と警察が集まると、その場で解決できるものが随分あると思う。

だれが旗を振るかじゃなくて、そういうものが結集できて、一つの方向に行けば、非常に活動としてはやりやすい。

委員

戸塚の場合は地域センターが当時なかったから、結果的にはそれがプラスになったのかもしれない。

委員

実際に動いてくださる若い方を取り込めるような活動をお願いしたい。あるいはそういう場所があれば、ぜひ警察の方から積極的をお願いしたい。

委員

スクールサポーターができた時から育成会の例会に出るようお願いしている。サポー

ターは学校を回って問題点は全部把握している、育成会に出てくるPTAのお母さん方は耳を傾けながら聞くという形になる。警察のサポーターの方は本当によくやってくれる。

委員

牛込警察、牛込母の会などと、神楽坂の通りや柳町の通りを回って、問題のステッカーをはがして歩いている。自販機で下着を売ってるのがあったが、撤去していただいた。そういう実態を、見ることも必要だ。

委員

警察は事件が起きてからでないといわれたが、すぐに解決できることは色々ある。

道が暗ければ、こういうものを設置してもらいたいとか。別にハード面だけではなくて、できることはあると思う。

委員

そんなことを私たちはしている。不健全な本とかを撤去してもらっている。

委員

もう一つ。サイトの関係、必要的共犯みたいな形だが、学童・児童は必ず被害者になる。持たせて安心だという部分もあるが本当に危険になる場合もたくさんあり得る。子どもに携帯電話を買わせるときには、そういうサイトにつなげないように、最初を買うときにケイタリングをかけてしまう。無料サービスで、多分ドコモを含めて4社、やっている。

部会長

いずれにしても、そういう情報が交換できれば、必要な心配も消えていくということになるんだろうと思う。大分集約してきた感じもするが。親、家庭に対してどういう具体の働きかけができるのか、今、浮かび上がってくるのは、一つは子どもの安全ということの一つのきっかけにして、そこで何か関わりがとれそうだ。「子どもの安全」ということをスローガンに、あるいは一つのきっかけ、大変辛いご時勢だと思うが、それは一つの問題になるのではないかと。

それと、もう少し具体的にどういう、ネットワークとしての、そういう協議会、それを各地域でどんどん積み重ねていくというアイデアは、きょう浮かび上がってきた。ほかに何か。

委員

親の意識改革の面で、根気強く呼びかけていくということ、これはもちろん大切だと思うが、例えばPTAあるいは学校、学校の校則あるいはPTAの会則なんかにも、そういったボランティア活動への強制参加なども盛り込んで、まず親の考え、意識を改革していかなければいけないと思う。それが安心・安全にもつながり、いろいろな子育ての支援にもつながっていくと思う。

部会長

その強制的なシステムはどの程度強制力を持つのか、これは非常にもろ刃だと思う。そこが一番悩ましいところだ。いろんな機会に呼びかけるといふことが、無関心でいる親を、どう意識を変えていくのかということだが。

委員 地域の方の取り組み、ここのところの動きは本当に積極的で、まとまりがあって、なおかつ具体的に動いているので、方向性は全く間違っていない。それは中学校のPTA

の大方の受け取り方だ。どちらかというと、地域の方がまだ遠慮をしている。

区立中学校の場合は公共であるということで、まず学校長が、変わるとガラッと学校が変わる。システム化をつくる意欲的な学校長のいる学校がこれからの姿であり、地域との関係についてシステム化をすべきだと思う。学校選択制になって、地域の子は必ずこの学校に上がってくるんだと、いうわけにはいかない。

それから、今は少子化になって、現の中学生が非常に少ない。学校の意見も、預かった子どもさんをいかに気持ちよく学校生活で育てていくかに尽きている。

新宿区だけの中学校、そういうものができれば、新宿区内だけで本当に回って、密に校長会やらPTAやら、本当にうまく回ると思うが、東京都というものがあつての話でそれは無理な話だ。学校を含めた次世代の育成の話というのは、うちの中学校は新校だが、育成会は久保と若松と、両方かかわってくれ、非常に積極的に関わってくれPTAとしてもとてもありがたい。

PTAの仕事がふえるから嫌だという人もいるが、やればそれなりに良かったんで、終わる。その良かったんで終わる人をもっとふやしたい、そこが一番の問題だ。

親がなぜ出てこないかについて、学校がもう少しPTAなり地域なりを受け入れ、教育委員会ももっと積極的に取り入れる。また、全校集会なりPTAの集会などは、親がこれは聞いておかないと、将来自分の子どもに非常に関わりがあると思うホットなテーマが大切かと。教育委員会ももうちょっとこれはまずいなというようなものを出してこない、親は出てこない。

部会長

ネットの犯罪に子どもたちが巻き込まれるというようなことはテーマにならないか。

委員

テーマになった。

ホットなテーマには、統廃合の問題もある、地域の中に学校があるから、自分の出た学校だったら、やっぱり元気良く関わってくれる。統廃合となると地域の人もちょうど引くということも現実にある。OBである親も多いので、いろいろ地域の話をする中で、地道に、一步一步埋まっていくと思う。

委員

その学校のことだが、前の大統領の教育改革の一端で、アメリカで「**ゼロトレランス**」と言ったと思うが、ご存じないか。

荒れた学校があつて、そしてそれを直すために、いわゆる校則とか何かを厳しくしていくということ。それがすごく成功して、そして子どもたちも仲よくなったと。

まさに、今、いじめとか、いろんな問題を抱えている中で、そのいい事例を少しでも取り入れてやっていくのも方策ではないか。そうすると。当然親が呼び出されるから、親が意識をしっかり持つようになるのではないか。

部会長

戸塚の場合は、教育委員会の関わりは。

委員

教育委員会の関わりは、一切ない。ほとんど地域の中とのつながりがない。

部会長

学校は基本的に教育委員会の管轄下にある。教育委員会のご意向をというか、意向を常に校長は聞かないと、学校運営というのは、経営というのは基本的にできない仕組み

になっている。新宿区の教育委員会と、今度は東京都の教育委員会がある。上には文科省があるけれども、新宿の場合はどういう関係になるのか。東京都の教育委員会と新宿区の教育委員会との関係は。

福祉部長

まず、学校の施設というのは、区立小学校では区のもの。先生方は東京都の職員ということで、その系列がもちろんある。ただ、新宿区では教育委員会を持っており、そこで教育長、教育委員がいて、新宿区の教育をどうするべきかという議論はされている。私どもは区長部局というが、きちんと連携をとって今いろんなことを進めていくことが大きな課題になっている。ただ、学校教育の部分については、教育委員会の所管ということだ。

それ以外の、今回の、例えば「放課後子どもひろば事業」であるとか、さまざまなどころでは連携して実施していく。今回の子どもひろばは、まさに連携事業だ。

部会長

学校開放運動、この場合に、教育委員会は関与しているのか。

事務局

これまでは校庭開放は、教育委員会の地域教育課というところがやっていた。PTAも教育委員会の方で所管している。今回、その学校を活用した居場所づくりということでは、教育委員会だけではなく区長部局も一緒になってやっていく。

部会長

それで実現するわけだ。

事務局

次世代育成支援推進については、本部会議というのが庁内にあり、区長を頭にして、教育委員会の職員も入って、一緒に横断的に組織はつくってやっている、こういうところへ出た意見についても、質問が出たりするが、各所管の方に伝えるような作業もしている。

ただ、生の声、意見が出たときに、何かすぐ答えができることも必要だ。

部会長

そういう意味で、教育委員会がかかわると解決することもあるのではないか。

事務局

年度の課題としては、こういう会議の場に教育の担当も同席するような形が、やっぱり必要なのかなと感じている。

部会長

今日の戸塚の一つのアイデアを借りれば、そういう会の中に、その学校、PTAという単位だけではなくて、この中に警察関係も当然入ってくるわけだろうし、消防関係も入ってくるだろうし、そういう一つの中に教育委員会というシステムも入りやすいような、学校単位ではなくて。そういう協議会的なものが各地域につくられていくと、とても非常に身近な問題が解決できるようなものもあるんだろうと思う。すべてがそれはできないけれども、それを目指してその積み重ねが幾つかあれば、皆さんも入ってくるだろうし、やりがいもあるだろう。

委員

公立の学校の場合は、全く名簿がない。役員の住所ぐらいしかわからなくて、どこに住んでもかも分からないし、何をしている方も分からない。

地域の方の催す行事があって、ああという感じでわかるというのは、PTAをやったよかったと思う。

中学校ですと学校選択制で、地域の人がほとんどだが、それでもいろんなところから来る。それで名簿がない。だれだか全然わからない。中学校になると、本当に親がわか

らない。地域、町会、その学校とどうやってかかわるかが、それも具体的にかかわらないと、ますますわからなくなっちゃうと思う。ここは、ちょっと痛かった。

委員

今の親とのかかわりというところで、小学校に上がる前に、お子さんとお母さんたちと一緒に交流できる日というのを設けモデル校になっている。学校側の主催でそういう場を提供していただく自然な関わりというのが、素晴らしいなと思っている。

最初の一步のところで地域の保護者の顔がわかるようなシステムを、必然的なかかわりとして持たせてもらえるとうれしい。

また、先生の仕事がふえ過ぎている。そのために先生たちが疲れ、子どものことに手がけられる時間がすごく減っていてすごく寂しい。

部会長

そういうような声自身も、このネットワークの中で教育委員会なり、関係者がかかわることによって……。

委員

今、アルミ缶回収という作業をしている。アルミ缶回収母の会というところが支援をして、子どもと一緒にやってきたが、3年前からお母さんたちが当番で、自分の子どもがやる時には付くということで、始めたが、子どもと一緒にいいことをしたいと思っている姿勢はあるのだと感じた。そういう部分での取り組みがどんどんふえていくといいのかなと。

部会長

その具体的な活動については、いろいろなアイデアはあると思う。「あいさつ運動」をするとか「マップづくり」をするとか、そういうきっかけ、管理の問題もあると思うが、まずネットワークを結ぶ、そういう組織をつくる、そこがまず一つ大事なのかな。

委員

自分の中の構想の中で、例えば小学校1年生のお母さんと子どもで、一つ遊びのコーナーをつくって、みんなで遊び場をつくろうねというのをやりたいと思っている。

例えば「缶パーク」「新聞プール」など、お母さんたちがコーナーを設けた遊び場ができると、継続的に関わっていけるのでは。

部会長

それは例えば学校開放の動きに対しても連動できるのでは。

委員

かわいい子どもと一緒に何かしなきゃと思っている子どもを持つ親に、一緒にかかわる楽しさみたいな部分とこの子どものお母さんはこの人ねというのが分かる機会を1カ所つくっていききたいなど。

部会長

かなり長期的に、そういう小さいうちからかかわることによって、上にずっと行くだろうということはある。

委員

今度、中学生がそこにかかわって、「中学生のひろば」があったりとかして、そこにお

母さんたちが手伝いに入れるような、模擬店みたいなのが入ってくると、中学生のお母さんも関われるかなというのがある。

部会長

大学という資源を活用するというのも可能だと思う。

もっと大学との連携をすることによって、もう少し学生もかかわりやすくなるだろう。ボランティア活動が、ある意味での単位化に結びつけられれば、大学の方も、それは望んでるはずだ。地域連携というか、地域に対する貢献というのは、大学評価の重要なファクターだ、そんな時代だ。

委員

学校というのは、しつけは家庭で、学校は勉強するところというのがもう基本的に思っている。それをうまくするためにPTAがあるとか、地域がある、その辺の基本的な線というのを、やはり踏まえた方がいい。

委員

先生は本当に忙しい、しかし、例えば命の教育を育成会の中ではやっていて、体験授業をやっている。そういうものを理解していただいて、子どもたちに参加を促していただくということってすごく大事だなと思っている。ことしの育成会、四谷育成会としては、先生方にもPR活動をしよう。学校と絶対つながることがあるはずだと。

校長先生しか育成会のことを知らなかった。そういう部分では、代表の人さえ知ってあればいいのかといたら、そうではなかったことに気がついた。PTAにも見てほしいということでの周知活動を始めたところだ。

部会長

学校の活動と教育活動と地域活動とが、全く別のものでは決していない。

特に、最近の教育の中では、命の大切さとか、そういう授業が展開されなきゃいけない。総合的な学習の時間などでやってることは、まさに地域の活用だ。その地域のいろんな資材、資源を活用しての新しい教育、これが今、非常に重要視されているわけだ。そういうものとのドッキングというのは当然ある。

ただ、それを結びつけるネットワークがなかった、残念ながら。今のお話のように、校長先生しか地域に出て行かなかったりとか、そこに輪ができれば、解決できることというのは意外とあるのだろうと思う。

委員

「放課後子どもひろば」というので、放課後、子どもがいる。そして、遊びの支援員とか学習支援者は区の方で配置するが、地域のボランティアやグループの方がそこにいるんなイベントを、もうどうぞしてくださいというスタンスでやっていく。

また、今、子どもたちは、例えば児童館や学童クラブでも、一人で帰るのが前提にはなっているが、迎えに来る保護者の方がすごくふえてる。

そういうときを接点として、何か、例えばPRなりちょっと顔を出していただくとかできないのかなと思った。

委員

それでやっぱり学校がキーワードなのか、皆さんのお話を伺って思った。

部会長

ひとつの場だ。学校の中で、何か場をつくるという、それをつくるのが、今は非常

に課題なんだと。それがいろんな組織を横につなぐネットワークの場として、例えば学校開放なんかは一つのきっかけにもなるだろうし、いろんなところがあるんじゃないか。

委員

今冒険遊びというのをやっている。子どもたちに何かを考えてもらいたいということを中心にやってる。ところが放課後の居場所というのは、与えられる中に入るような感覚がある。

部会長

そこをこれからつくる、方向づけるということは可能だ。

事務局

ひろばを運営していく上で、連絡会というのをつくる。PTAの方とか、いろんな地域の児童館の職員とか、学校も入って、どういうふうに運営していったらいいのかというのを、これから話し合っていく。ひろばをどういうふうにしたらいいだろうかということで、一つその選択肢がふえ、大きい遊び場もあり、こういう学校も活用できるというふうに考えていただけたら。

部会長

今、一つの動きが、動き出してるところだ、そこを軌道修正するような、そういうベクトルの力を加えていくということは無駄じゃないと思う。

まとめについては、少し事務局とやりとりして、皆さんの方にはその結果をフィードバックしながら、最後の3月の報告書をつくっていきたいというふうに思う。

午後5時閉会